

ひなたの

匠

Hinata no Takumi

祭り・祝いの心



# みやざき 伝統的工芸品MAP

① 高千穂町

高千穂神楽面  
かるい

② 日之影町

かるい  
竹工芸品  
高千穂郷しめ縄・  
わら細工

③ 五ヶ瀬町

魔よけ猿

④ 椎葉村

椎葉神楽面

⑤ 諸塚村・美郷町

めんば

⑥ 西米良村

てご

⑦ 西都市

竹工芸品  
日向剣道防具

⑧ 小林市

日向榎碁盤・将棋盤  
小林籐工芸品  
日向竹刀

⑨ 綾町

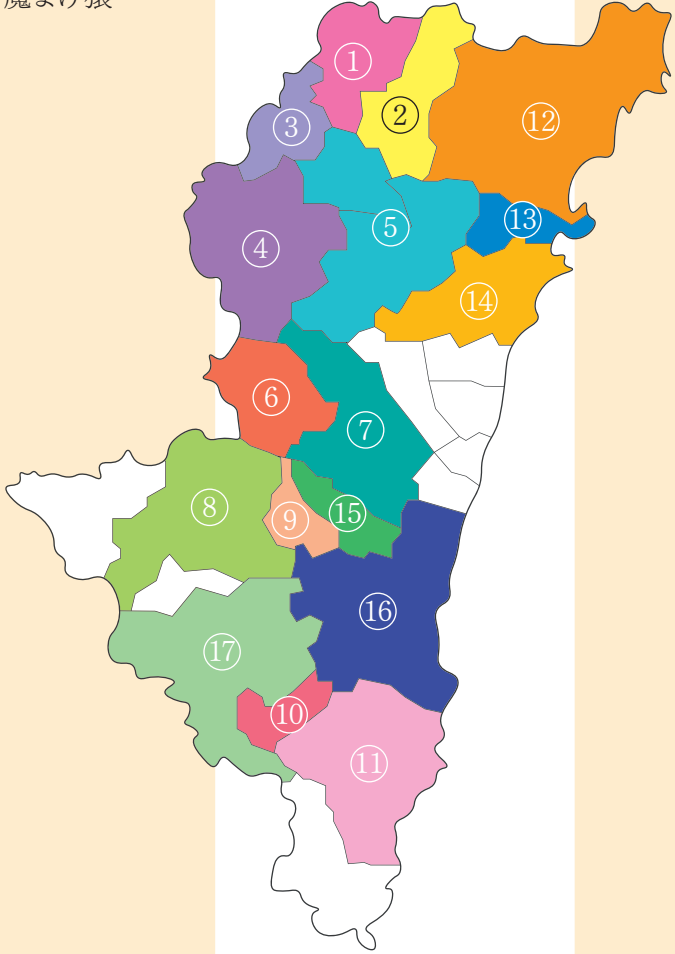
綾の手袖・宮崎手袖・  
日向榎碁盤・将棋盤  
綾ガラス

⑩ 三股町

日向焼  
手打刃物

⑪ 日南市

四半的矢  
日向工芸家具



⑫ 延岡市

のぼり猿  
紅溪石硯  
日州透かし象嵌  
延岡五月幟  
大漁旗

⑬ 門川町

門川太鼓

⑭ 日向市

日向はまぐり碁石  
宮崎手漉和紙

⑮ 国富町

法華岳うずら車

⑯ 宮崎市

宮崎ロクロ工芸品  
小松原焼  
宮崎漆器  
ひむか・久宗の矢  
四半的矢  
佐土原人形  
神代独楽  
久峰うずら車

⑰ 都城市

\*本場大島紬  
\*都城大弓  
宮崎ロクロ工芸品  
都城弓  
都城木刀  
さつま餅  
日向竹刀  
ごったん

※国指定伝統的工芸品

# 宮崎県の伝統的工芸品

## —— 伝統的工芸品とは ——

伝統的工芸品とは、長年受け継がれてきた伝統的技術、原材料を用いて手工業的に製造される工芸品のことで、県又は国の定める指定要件に基づいて指定されます。現在、宮崎県内では宮崎県指定伝統工芸品に37品目、国指定伝統的工芸品に2品目が指定されています。指定要件は、以下のとおりです。

## —— 宮崎県伝統的工芸品等指定要件 ——

### 伝統的工芸品

- (1) その製造過程の主要部分が手工業的であること。
- (2) 60年以上の歴史を有する伝統的技術又は技法により製造されるものであること。
- (3) 伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ製造されるものであること。



宮崎県知事指定  
伝統的工芸品指定マーク

### 指定事業者

- (1) おおむね30年以上にわたって当該県伝統的工芸品を制作していること。
  - (2) 当該県伝統的工芸品に関して伝統工芸士として認定を受けたものが在籍していること。
- 注意：(1)(2)いずれかに該当すること。

### 伝統工芸士

- (1) 宮崎県内に居住していること。
- (2) 宮崎県伝統的工芸品の製造に15年以上従事していること。
- (3) 宮崎県伝統的工芸品の製造に関する高度の伝統的技術・技法及び必要な知識を有しその維持・発展に努めていること。

## —— 国 伝統的工芸品等指定要件 ——

### 伝統的工芸品

- (1) 主として日常生活の用に供されるものであること。
- (2) その製造過程の主要部分が手工業的であること。
- (3) 伝統的な技術又は技法により製造されるものであること。
- (4) 伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるものであること。
- (5) 一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているものであること。

注意：ここでの“伝統的”とは、およそ100年間以上の継続を意味します。

### 伝統工芸士

- (1) 国指定の伝統的工芸品の製造に12年以上従事していること。
- (2) (1)の要件を満たす者のうち、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会が行う伝統工芸士試験に合格した者であること。



伝統マーク

このマークを使った伝統証紙が貼られている工芸品は、産地組合等が実施する検査に合格した経済産業大臣指定伝統工芸品です。

# 高千穂神楽面

Takachiho Kagura-men



## 作業工程



木取り前のクスノキ



木取り(女面)  
四角に切った木から顔の輪郭をかたどる。



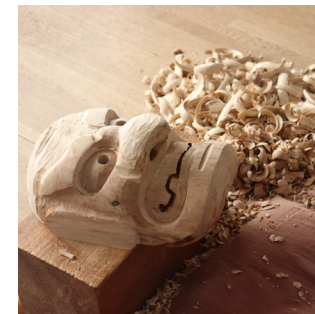
木取り(男面)  
四角に切った木から鼻を取り出す。



あらけずり、小作りの工程  
鼻→目→口→耳の準備に掘り出していく。様々な道具を使って神様を掘り出す。3日以上かけていねいに掘り出す。



木くずから木の香りが漂う。



あらけずり、小作り完了。



彩色して完成。

## 表情豊かな面を抜きに 高千穂神楽は語れない

高千穂町一帯に古くから伝わる高千穂神楽は、昭和五十三年に国の重要無形民俗文化財に指定されていますが、この神楽の舞いに欠かせない神楽面も高千穂の代表的な工芸品となっています。

材料は、神楽舞用に軽い桐、装飾用に木の香りのよい楠が使われ、彫刻機械を使い粗削りをした後は、すべて手作業で仕上げられます。この過程の中で、面に生きた表情を出すことが一番難しく、繊細な表情を作り出す木彫りの技術は高く評価されています。

装飾用の面は、手力雄命(たじからおのみこと)と天鈿女命(あめのうずめのみこと)が主に作られ、開運招福の神として崇拝されていることもあり、最近では、観光土産品や贈答用として人気が高まっています。

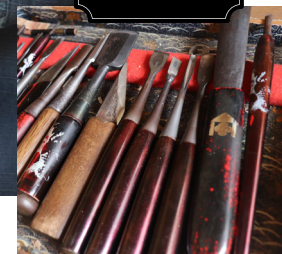


# ひなたの匠

Hinata no Takumi



匠の道具



力強い面を彫り出す「のみ」

## 工藤 浩章さん(県伝統工芸士)

平成24年度に県伝統工芸士に認定されました。以前は車の整備の仕事をしており、昔から物作りには興味があったと語る工藤氏。「木くずを取り払って神様をお迎えする」という思いで神楽面を彫っています。また、工藤氏自身も神楽を舞うといえます。そうすることで、自身が作る神楽面とより向き合うことができると語りました。

### DATA

#### 神楽面工房 天岩戸木彫

〒882-1621  
宮崎県高千穂町大字岩戸399  
☎0982-74-8901  
※電話でのご注文を受け付けております

- [ご購入可能店舗]
- みやざき物産館 KONNE(こんね) ☎ 0985-22-7389(宮崎市)
  - 道の駅高千穂 ☎0982-72-9123(高千穂町)
  - トンネルの駅 ☎0982-73-4050(高千穂町)



HPはこちら [☞](#)

# 椎葉神楽面

Shiba Kagura-men



## 作業工程



材料は檜や桐を使用する。



胡粉と膠液を混ぜた液体を面に塗る。  
膠とは動物の脂のこと。



設計図に基づいて計算された高さになるように彫る。



胡粉と膠液を混ぜたものは裏ごしをする  
(二度塗り用)。



下塗り  
一度塗りには薄い液体を使用し、二度塗りには裏ごしした濃い液体を使用する。



五色墨  
胡粉と膠液を混ぜた液体に五色墨を  
磨りながら色を作る。



ガーゼに染みこませて塗布しながら色  
を付けていく。



女面の完成品  
眉などは墨で1本1本描く。

## 神々の優しく厳しい表情を 写し取る

平成二十八年九月六日に、三十六品目の宮崎県伝統的工芸品として指定されました。

国の重要無形民俗文化財に指定されている「椎葉神楽」では、村内二十数地区で保存伝承されています。神楽に欠かせないものの一つである神楽面は、村内に百八十以上あるそうです。

神楽面は芸術的要素を備えており、伝統的技術・技法を必要とする工芸品です。室町時代のもと言われる面もあり、神楽の歴史の深さを感じられます。



## DATA

### 面工房 古川

〒883-1601  
宮崎県東臼杵郡椎葉村下福良282-34  
☎0982-67-2228



HPはこちら [☞](#)

ご購入可能店舗 [🛒](#)

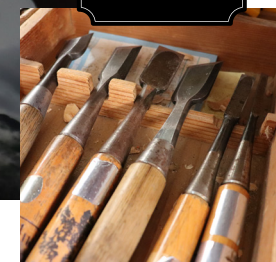
# ひなたの



## Hinata no Takumi



匠の道具



### 古川 三鶴亀さん(県伝統工芸士)

面を彫る「のみ」

始めは手探りで神楽面を作っていましたが、熊本県で能面作りのプロに弟子入りをしたことがきっかけで本格的に製作を始めました。10年間通い続けその技術を神楽面に活かして製作をしています。椎葉に伝わる昔ながらの神楽面はもちろん、古川氏のオリジナル面(創作面)を作ることも多いそうです。また、修復にも取り組んでおり、鶴富屋敷の神楽面等も修復しました。

# 延岡五月幟

Nobeoka gogatsu-nobori





## 作業工程



小麦粉とミョウバンを混ぜた液体に、白地をつけ込む。



つけ込んだ白地を絞って干す。これを繰り返すことで染料がにじまない。



下地の上下に巾張を差し、まっすぐ伸ばす。



延岡五月幟は、寛永年間から作られ始めたものといわれ、その製作工程も「木綿生地裁断」→「晒し」→「下絵付け」→「のりづけ」→「顔料染め」→「色止め」→「乾燥」→「のりおとし」→「仕上げ」と、当時のままに一品一品丹精に仕上げられます。

特に、「下絵付け」・「のりづけ」・「染め」は、時の流れとともに磨き上げられた匠の技のみせどころともいえます。

勇猛な武者の姿そのままに  
風雨に強く鮮やかさを保つ



巾張



下絵を描く。  
輪郭→衣類→顔の順に描く。



染料



色は黒→灰色→赤や黄色などの順に色をつけていく。



幟が完成したらのりを落とす。



完成品



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



匠の道具



染色に使う愛用の筆

## 吉井 汪さん(県伝統工芸士)

延岡五月幟は、汪氏の父親が14代目、汪氏は15代目となります。昔は藍甕を用いて、藍染をしていました。技術は見て盗めるものではなく、何度も繰り返し実践する中で身につくものだという信条のもと製作にあたっています。延岡五月幟の製作は約1週間ほどかかるそうで、お客様にはぜひ店舗に来ていただき実際に見て購入して欲しい、と話します。

### DATA

## 吉井染工場

〒882-0841  
宮崎県延岡市大瀬町2-4-1  
☎0982-32-3134

※ご購入は工場でのみ可能ですので是非お越しください



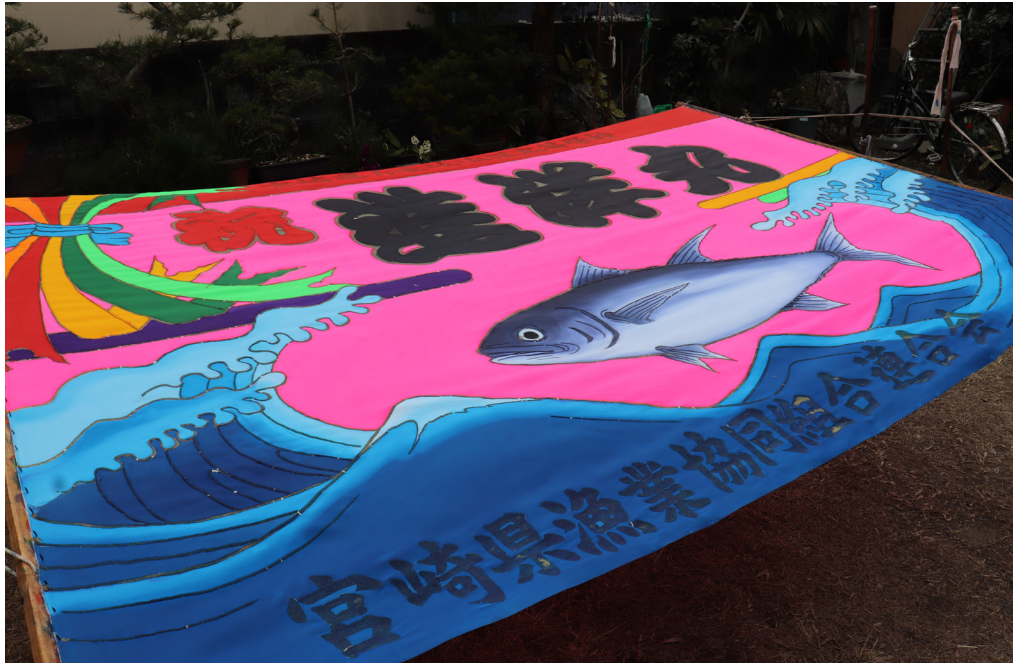
HPはこちら [☞](#)

# 大漁旗

Tairyoubata



## 作業工程



生地のカット



下書き  
生地に柳炭と紅でデザインを描く。



糊置き  
ケタに布を張り手作り糊をおく。



染方  
乾燥させた生地に配色する。顔料を配合し色を作るが、配合の分量は長年の勤で配合するため、何通りもの色を作ることができる。配色は全体のバランスを見て決めている。



乾燥  
天日干しで色止めをする。天気が悪い日は熱を加え熱処理する。



水洗い  
色止め、熱処理した後、半日程水につけ糊を洗う。



宮崎の文字には糊が置かれている。  
糊を洗うと白が浮き上がる。



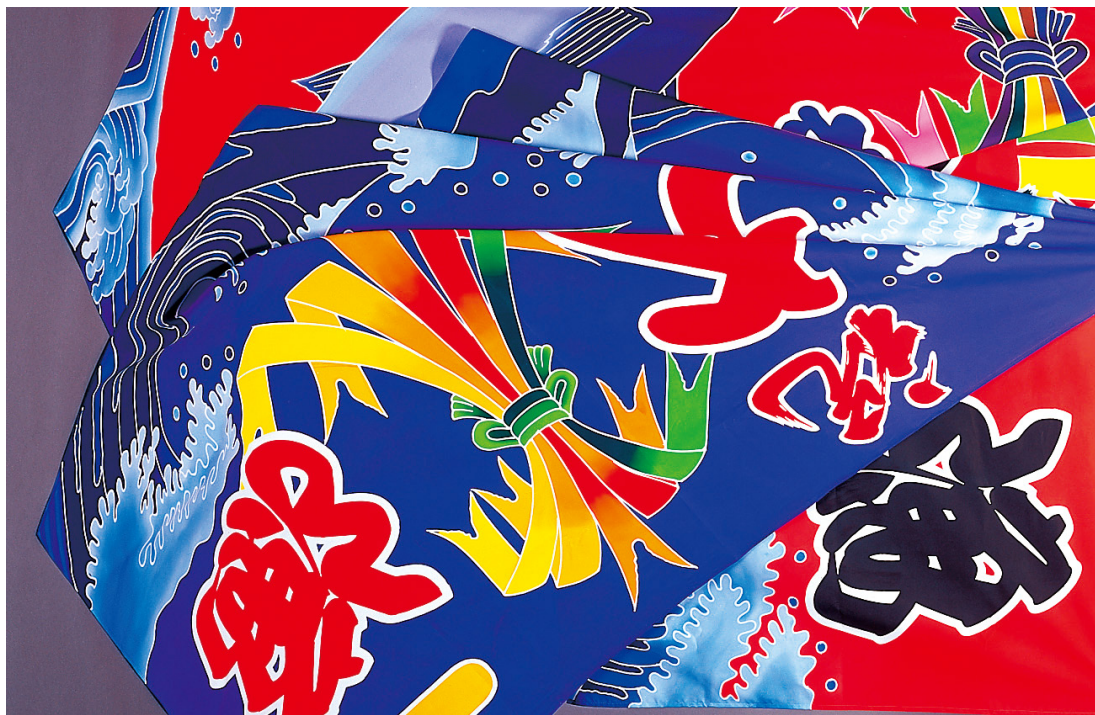
乾燥、仕立て  
再び乾燥させた後、三つ折りして仕立て上げアイロンをあてて完成。

## 大漁を願う人々の心意気を 表した鮮やかな色彩

大漁旗は、海事にまつわる祝いごとのたびに、船上高く掲げられます。

大漁を感謝し、再び大漁を願う漁師の心意気が、鯛、鶴、亀などの縁起のよいとされる絵模様と、鮮やかな色彩で表現されています。

その製作過程は、まず、柳炭で生地に下絵を描き、その下絵に沿って、染色の際に色がにじまないようにのり置きをします。のりを乾燥させた生地にはけで手染めを行い水洗、乾燥ののち、仕立てをして完成です。染色は、最近ではあまり見られなくなった「筒描き」により行います。これは、のりを筒にいれて手描きする伝統的な技法で、長年の経験が必要とされる最も難しい作業です。



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



匠の道具



愛用の筆

匠の道具



染付用の染料



## DATA

吉田旗店

〒889-0301  
宮崎県延岡市北浦町古江2211-1  
☎0982-45-2244



吉田 儀男さん(県伝統工芸士)

吉田 幸子さん

吉田 儀男氏は延岡、京都、福岡、大分で約15年修行し、昭和45年に北浦町へ戻ってきました。父親が2代目で、父親の仕事を見て学んできました。平成元年度に県伝統工芸士に認定され、現在は妻の幸子氏と共に夫婦で二人三脚で仕事を行っています。

儀男氏は、「漁師の皆さんに喜んで頂けるような大漁旗を精一杯作りたい。技術の習得には10年かかった。大切なことは研究を続けることであり、その結果、良い仕事ができる」と語りました。

HPはこちら [☞](#)

# 佐土原人形

Sadowara-ningyoh



## 作業工程



人形の型  
昔から引き継がれている人形の型。



うさぎ面の型  
土づくり、粘土こねの行程を経て、型に粘土をいれる。



窯  
型入れ後、乾燥させたものを窯で焼く。粘土をいれる。



窯出し



絵付け前  
素焼きした人形に白塗りを行う。  
左：白塗り後 右：白塗り前



白塗りの様子



絵付けの様子



絵付けの様子



人形の目は最後に入れる。  
目の描き方で表情が変わるため、慎重に行う。

## 素朴な温かさが持ち味の 色使い豊かな人形の魅力

佐土原人形の歴史は古く、約四百年程前に作り始められたと言われています。しかし、その起こりにはいろいろな説があり、はっきりとした記録は残っていません。佐土原は、島津藩の分藩として、江戸時代に町人文化が栄え、「佐土原座」を中心に佐土原歌舞伎が発展しました。それとともに、質の高い歌舞伎土人形が生み出されるなど、京都の伏見人形の強い影響を受けた佐土原人形も発展していきました。

人形は、差し手、差し首を別々に作り、それを組み合わせる独特の手法で作られます。そして、泥絵具を使った色付けも、原色が多く使われ、その色使いも佐土原人形の特徴になっています。

代表的な作品「まんじゅう喰い」のほかに、「節句人形」「歌舞伎人形」など、多くの種類がありますが、どの人形も素朴で、庶民的な温かさがにじみ出ており、何とも言えない魅力を持っています。



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



匠の道具



絵付けに使う愛用の筆

## 下西 美和さん

阪本家が6代にわたり伝統的な技法を継承していましたが、博物館で行われた阪本氏による絵付け体験に参加したことがきっかけで佐土原人形に魅了され、下西氏が2019年4月に7代目を引き継ぎました。血縁でない自分に継がせてもらったことに感謝して、1つの文化として伝え継ぐことができる人間でありたいとの思いで佐土原人形の製作に日々取り組んでいます。

### DATA

## 佐土原人形店ますや

〒880-0301  
宮崎県宮崎市佐土原町上田島1396-10  
☎070-4226-3641  
営業時間: 10:00~15:00

### [ご購入可能店舗]

- ・宮崎ブーゲンビリア空港 ☎0982-20-3900(宮崎市)
- ・宮崎県立西都原考古学博物館 ☎0985-22-7389(西都市)
- ・みやざき物産館 KONNE(こんね) ☎0985-22-7389(宮崎市)



HPはこちら [👉](#)

ご購入可能店舗 [🛒](#)

# 法華岳うずら車

Hokkedake-uzuraguruma





## 作業工程



イヌダラの皮をピーラーで剥く。



40°の角度で斜めに切り、胴体を作る。



なたで目を描く部分を斜めに切る。



のこぎりで竹ひごを通すための切り込みを入れる。



ナイフ等で各面をきれいに削って整える。



顔と体の模様を描く。



竹ひごの先端をナイフで細く削り車輪に押し込む。



金づちで車輪を打ちつけて固定する。



完成品

## 大胆な切り込みから生まれる 表情豊かなうずら車

法華岳うずら車は、日本三大薬師の一つといわれる国富町の法華岳薬師に、また、久峰うずら車は、佐土原町久峰観音に、縁起物として古くから伝わる、ひなびた趣を持つ玩具です。

材料は、本体がタラの木、脚代わりの車として小松の丸木を輪切りにしたものを使用します。作り方は多少異なり、法華岳うずら車が焼火ばしで穴を開け、車の心棒をつけているのに対し、久峰うずら車は、切込みを入れて竹をはめ込み、その竹に心棒を通して車が回るように作ってあります。

両者の間には色彩の面でも多少違いがありますが、全体に、法華岳うずら車が切込みの角度などから男性的なものを感じさせるのに対し、久峰うずら車は、優雅で女性的なものを感じさせます。



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



右が小山五雄氏、左が妻の豊子氏

## 小山五雄さん

法華岳うずら車は昭和58年度に県伝統的工芸品に指定されました。主材料のイヌダラは鋭いとげをもち、病気や幸から身を守ると言われることから、魔よけの木と地域では言われています。小山氏は山師として森林管理署で働いていました。退職後も看板や小屋など大きなものから椅子や額縁など小さなものまで様々なものを作っており、うずら車は父親が作る姿を見て覚えました。

### 匠の道具



手作りの道具 ピーラー

### DATA

## 国富町役場

〒880-1101  
宮崎県東諸県郡国富町大字本庄4800番地  
総務課: ☎0985-75-2016

※法華岳うずら車のお問い合わせは国富町役場で受け付けて  
おります



小山氏の工房の様子

# 久峰うずら車

Hisamine-uzuraguruma



## 作業工程



材料であるタラノキの皮を剥いて2・3ヶ月乾燥させる。中心に穴が開いている場合は、穴を塞ぐための木を入れる。



先端を削り、頭を作る。



表面を削り、胴体を作る。



切り込みを入れ、車の心棒を取り付ける。



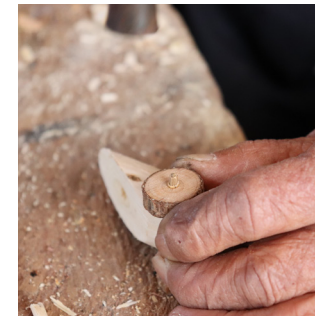
心棒を取り付ける。



好きな大きさにカットし、表面を削って整える。



車輪を心棒に取り付ける。



車輪が抜けないように心棒止めを取り付ける。



塗装を施し完成。  
雄…赤と緑  
雌…茶と緑

## 表情の違いを楽しむ 野趣あふれる縁起物

久峰うずら車は、佐土原町久峰観音に、また、法華岳うずら車は、日本三大薬師の一つといわれる国富町の法華岳薬師に、縁起物として古くから伝わる、ひなびた趣を持つ玩具です。

材料は、本体がタラの木、脚代わりの車として小松の丸木を輪切りにしたものを使用します。作り方は多少異なり、久峰うずら車は、切込みを入れて竹をはめ込み、その竹に心棒を通して車が回るように作ってあるのに対し、法華岳うずら車が焼火ばしで穴を開け、車の心棒をつけています。

両者の間には色彩の面でも多少違いがありますが、全体に、久峰うずら車は、優雅で女性的なものを感じさせるのに対し、法華岳うずら車が切込みの角度などから男性的なものを感じさせます。



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



## 兵頭 正一さん(県伝統工芸士)

昭和58年度に県伝統工芸士として認定。子どもたちに楽しんでもらいたいという思いで日々玩具を作り、そして自分たちでも作れるように、子どもたちの目の前で作っています。うずら車は、雄が赤と緑、雌が茶と緑を使用して塗装します。雌は卵を守らなければならないので、目立たないようにあえて色味を抑えています。令和5年現在、久峰うずら車の伝統工芸士は兵頭氏のみです。

### DATA

#### 兵頭工作所

☎0985-74-0397

※電話での注文を受け付けております


[ご購入可能店舗]

・宮崎市城の駅「佐土原いろは館」

☎0985-74-4649(宮崎市)



宮崎市城の駅「佐土原いろは館」

ご購入可能店舗 

# 神代独楽

Jindai-goma



## 作業工程



独楽の胴体の大きさにするよう竹を切る。



風切り窓を作るために数カ所、小さな穴を開ける。



小さな穴を繋げ、縦長に穴を開け風切り窓を作る。笛のように中を少し斜めに彫る。



手作りの専用機械でふたを円状に削る。細かい所は手彫り。



ふたが大きい場合は再度削りながら調整する。



独楽の心棒を取り付けるために、ふたの中央に穴を開ける。



心棒を取り付ける。でこぼこしている方が糸が巻き付きやすい。機械にはできない手業。



松の根で少しづついぶす。



模様を入れる専用のシートを型取りしたものをはがして完成。

## 豪快な音が特徴の 手作りのうなりごま

神代独楽は、島津佐土原藩、現在の宮崎市佐土原町西佐土原地方で作られている手作りの竹ごまです。

武家の子弟の玩具として愛好され、その後、魔よけとして端午の節句の贈り物に使われたようです。

その製作工程は、まず、生竹を輪切りにし、風切り窓を開けます。次に、竹の穴に合わせ、ひのきの板でふたをし、こまの胴を作ります。

竹の乾燥を利用し、きっちりとはまるように工夫されているのが特徴です。胴に穴を開け心棒を取り付けた後、松でいぶして、黒光りする光沢のある胴を仕上げます。さらにこれを二ヶ月ほど乾燥させた後、胴の両端、心棒に彩色して出来上がります。

豪快な音をたてる貴重なうなりごまです。

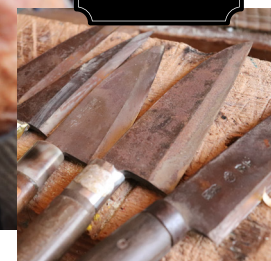


# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



匠の道具



愛用の重みのある包丁

## 兵頭 正一さん(県伝統工芸士)

神代独楽は昔から作られている玩具です。兵頭氏が3代目になります。

子どもたちに楽しんでもらいたいという思いで作り、そして自分たちでも作れるように、子どもたちの目の前で作っていました。独楽で楽しむ姿を見ることが本当に嬉しいと語り、いかに綺麗な音が出るか、いかに長く回ることができるかは工芸士の腕にかかっており、長年の経験がものをいうのです。

### DATA

## 兵頭工作所

☎0985-74-0397

※電話での注文を受け付けております


[ご購入可能店舗]

・宮崎市城の駅「佐土原いろは館」

☎0985-74-4649(宮崎市)



宮崎市城の駅「佐土原いろは館」

ご購入可能店舗 

ごったん

Gottan



## 作業工程(胴のみ)



材料の杉  
50年から100年たったものが良い材料となる。



製材の工程



カンナで厚さの調整を行う。



材料に印をつけながら切る。



縦板と横板にホゾとホゾ溝を作る。



棹を差し込む穴を作るための下書き。



ごったんは、別に板三味線と言われるように主に杉を材料とした素朴な弦楽器です。薩摩藩の時代、一向宗禁制により、念仏がわりにうたう歌の伴奏楽器として都城地方で広まったといわれています。  
三味線の皮の代わりに板が使われ、これにより低く歯切れの良い音色がでるようになっていきます。

## 杉板張りの素朴な弦楽器



棹を差し込む穴を開ける。



枠の組み立て  
木工用ボンドをホゾ側とホゾ溝側の両方に塗ってくみ上げ装着させ、はた金を用いて締め込みを行う。



完成品  
糸倉、棹、糸巻き、糸、胴箱、上駒、下駒、音緒、全ての材料がそろったら組み立てて完成させる。



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



## 上牧 正樹さん

平成18年に県伝統工芸士に認定された後、令和4年に逝去された黒木俊美氏にごったんの制作技術を師事。製作技術の保存というよりも、ごったん文化の活性化に重点を置いた取り組みで、各々が工夫しながら、自分なりのごったんを作れるようになることこそがごったん文化の活性化だと考え、平成30年にスタートした「ゴッタンプロジェクト※」の中で作り方を記録として公開しました。

※ゴッタンプロジェクトとは  
南九州地方に伝わる弦楽器「ごったん」の製作技術の記録、その歴史や音源に関する基礎資料の収集、ごったんの演奏者、職人、研究者などの交流を育むことにより、ごったんの継承と活性化の一助となることを目指した活動


### DATA

## 美木工房

〒889-1913  
宮崎県三股町餅原268-1  
☎090-9796-8366  
※電話での注文を受け付けております

[ご購入可能店舗]  
・物産館「よかもんや」 ☎0986-52-3131(三股町)



ご購入可能店舗 

# 魔よけ猿

Mayoke-Zaru





写真:五ヶ瀬町教育委員会

## 作業工程

- ①粘土
- ②型作り…粘土を型枠に入れ型作りを行う
- ③天日干し
- ④釜入れ…8時間ほど素焼きを行う
- ⑤装飾…鹿の毛で髪の毛を装飾する
- ⑥板付け…板に固定する



五ヶ瀬町立坂本小学校での魔よけ猿制作の様子

五ヶ瀬町立坂本小学校では平成12年2月17日より、6年生の卒業制作として魔除け猿を製作していました。小学校がある坂本地区には400年以上前から伝わる「荒踊り」を地域の方に習いながら、運動会等で踊っていました。その中に猿面が登場するが、その面を形どった工芸品「魔除け猿」を卒業制作とするようになりました。  
※現在は指導者が逝去したため行われておりません

## 荒踊りに欠かせない 貴重な厄よけのお面

魔よけ猿は、五ヶ瀬町に天正年間（一五七三年）から伝わる荒踊りで猿役がつけるお面です。

荒踊りは、昭和六十二年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。年に一回奉納される、この荒踊りは五ヶ瀬町坂本地区内全集落の住民が出演して行われ、県内外から多くの客で賑わいます。

踊りで使用される面の材料は木製、飾りとして使用する面は粘土で作られており、猿の毛の部分にはこの地方で捕れる鹿の毛が使用されています。厄よけのお土産品としても大変喜ばれています。



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



写真:五ヶ瀬町教育委員会



写真:五ヶ瀬町教育委員会

## 松本 幸安さん

魔よけ猿は平成17年度に県伝統的工芸品として指定されました。

現在は逝去されていますが、作り手の代表として松本幸安氏の記録がありました。松本氏は地元の祭りに使う面を知ってもらうことや子どもたちの健康を願って、各学校へ魔除け猿を寄贈していました。

# のぼり猿

Nobori-zaru



## 作業工程



体の塗装  
塗る範囲が一番広い部分から作業を行う。



頭の塗装



頭の装飾  
飾り付けの部分を丁寧に貼り付ける



顔の塗装



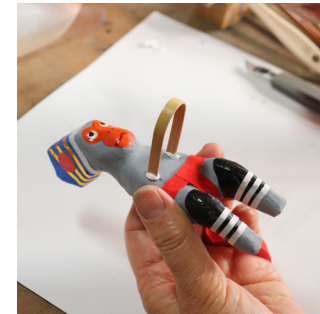
目・口の絵付け  
目の大きさや形で印象が変わるため、非常に重要な部分となる。



足の塗装と装飾



腰巻きの装飾



手の取り付け  
カッターで穴を開けて差し込み口を作り、手の部分を差し込む。



鼓を取り付けて完成。

## 猿の繊細な愛嬌ある表情に 伝統の技と心が生きる

のぼり猿の歴史は古く、江戸時代中ごろから延岡藩の武士達の手内職として作られ始めたと言われていています。

張り子の猿は、子供の立身出世、無病息災、平和と豊作を願ったもので、端午の節句に庭先に鯉のぼりと一緒に揚げられています。

その製法は、まず木材から猿の型を作り、その木材に紙を何枚も何枚も張り付けます。

背を小刀で切り開いて木型を取り出し、背を縫い合わせて色付けをした後、烏帽子(えぼし)、鼓(つづみ)、菖蒲(しょうぶ)の絵を描いたのぼりなどを付けて仕上げます。

猿の繊細な表情には伝統の技と心が生き、のぼりに風をはらんで竿(さお)を上下に踊る様は、大変風流で愛きようがあり、宮崎県の郷土玩具を代表するものの一つとなっています。



# ひなたの 匠

Hinata no Takumi



匠の道具



絵付けに使う愛用の筆

## 橋倉 由美さん

当時のたのぼり猿の作家が父親に引き継いだことがきっかけで製作に携わることに。昭和58年度に母親が県伝統工芸士として認定され、平成13年のたのぼり猿製作技術保持者として「延岡市無形文化財」に指定されました。その後娘である由美氏が受け継ぎ、現在に至ります。延岡市を代表する工芸品の一つであるたのぼり猿を、より多くの市民に知ってもらいたい思いで作っています。

### DATA

#### のぼり猿製作所「松本」

〒882-0804  
宮崎県延岡市西階町1丁目3717-10  
☎0982-32-5235  
営業時間:8:00~17:00



#### [ご購入可能店舗]

- 延岡市駅前複合施設 エンクロス ☎0982-20-3900(延岡市)
- みやざき物産館 KONNE(こんね) ☎0985-22-7389(宮崎市)

HPはこちら [☞](#)

# 門川太鼓

Kadogawa-daiko



## 作業工程

- ①原木切断…太鼓の大きさに合わせた寸法で切断
- ②乾燥…天日で完全に乾燥させる
- ③幹削貫…太鼓の内部である幹の削り貫き
- ④内部型作り…特に外側の光沢を生かすため紙ヤスリや砥の粉等で念入りに磨く
- ⑤ニス塗装
- ⑥皮の選別…牛の皮を選別、毛抜、水、石灰につけてあく抜き
- ⑦皮の乾燥…天日による完全乾燥
- ⑧皮張り
- ⑨装飾品取付…取手(真鍮)、装飾品(銅板)を取り付ける

至難の技がちりばめられた  
貴重な太鼓

門川太鼓は、ツガ・桜・ケヤキ等を材料に、原木切断・乾燥・乾ぐり・内外型作り・ニス塗装・皮の選別・皮の乾燥・皮張り・装飾品取り付けの各工程を経て完成されますが、特に材の厚さを均一にくり抜いていく技・皮張りの技は、至難のものといえます。ほとんどの工程が手作業であり、一つの製品が完成するまでには、約二ヶ月間を要します。

昭和五十八年度に県伝統的工芸品に指定され、昭和六十年度に吉田進氏が県伝統工芸士に認定されましたが、現在は逝去されています。現在は作られていない、幻の太鼓です。

